

# 一休と中国の詩人たち（白居易）

稲田 浩 治

1

一休の『狂雲詩集』に白居易を対象として詠じた詩はない。ただ題辭にその号である「香山居士」を含む詩があるだけである。それは、次のようなものである。

有<sub>レ</sub>妾 隨<sub>レ</sub>余年久矣 一日俄爾辭去

挽<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>留 盖効<sub>二</sub>香山居士之楊柳枝<sub>一</sub>者歟

因作<sub>二</sub>三詩<sub>一</sub>言<sub>レ</sub>懷云

離思悠悠<sub>二</sub>白髮新<sub>一</sub>

空依<sub>二</sub>脩竹<sub>一</sub>問<sub>二</sub>佳人<sub>一</sub>

沈吟夜々枕頭淚

燈瘦鰥床一老身

私には世話をしてくれる女がいた。長年私につき従って

れた。しかし、ある日突然いとまごいを告げて去った。引き留められけれども止まらなかった。思うに香山居士の「楊柳枝」の真似ごとになるうか。二篇の詩を作ってその思いを述べる。

別離の悲しみは絶えることなく、頭には白髪が目立つ今日この頃、甲斐のないことだが、若々しい竹に凭りかかってあの美しい人のことを思う。夜ごと詩を口ずさみ涙で枕を濡らしながら、一人寝の床に老いの身を横たえている。

ひたすら自分の元を去った侍女を追憶する詩となっている。二首目も同様である。

別後多情奈<sub>二</sub>斷腸<sub>一</sub>

長春花厭發<sub>二</sub>紅粧<sub>一</sub>

窈窕淑女約<sub>二</sub>君子<sub>一</sub>

猶詠<sub>二</sub>關雎詩一章<sub>一</sub>（『狂雲詩集』）

そして、この二篇の後には「妾和」という和韻の詩を付すが、こにも白居易は登場しない。

妾和

一朝分袂淚痕新

此地風流又孰人

初識江山沒詩客

再販艸舍寄吟身

つまり、これらは冒頭の題辭が説くとおり、白居易の「楊柳枝」の替え歌であった。白居易は自分の妾樊素・小蠻を解放した時のことを「別柳枝」という詩に作り、その後の思いを「楊柳枝詞」に歌っている。樊素は歌がうまく、小蠻は舞が巧みであったという。この二妓を白居易は楊柳枝に喩えて歌った。

別柳枝

兩枝楊柳小樓中

嫋娜多年伴醉翁

明日放歸歸去後

世間應不<sub>レ</sub>要春風（『白樂天全詩集』第四卷）

楊柳枝詞

一樹春風千萬枝

嫩<sub>二</sub>於金色<sub>一</sub>軟<sub>二</sub>於絲<sub>一</sub>

永豐西角荒園裏

盡日無<sub>レ</sub>人屬阿誰（右に同じ）

2

一休の『狂雲詩集』には白居易を対象として詠じた詩はなかった。しかし、『狂雲集』には三首、白居易を詠じた作がある。この偏向をどう理解したらいいのであろうか。

そこで思い合わされるのは、かつて中本環氏が「狂雲集は頌偈の集であり、いわゆる続狂雲集（狂雲詩集）の方は、詩の集であると考えられる」と言われ、両者の性格の違いを綿密に考証、

一休の文学やそれに対する態度、あるいは一休の人間像等をさぐる上で、一休が詩と頌偈を峻別した点は十分に留意されるべきである。」（『狂雲集』解説）

と結論づけられたことである。今、私はその妥当性に敬服し、三首の偈を読んでみようと思う。その中の一首。

白居易問鳥窠和尚 如何是佛法大意 窠曰諸惡莫作衆善奉行 白曰三歲孩兒也解<sub>二</sub>恁麼道<sub>一</sub> 窠曰三歲孩兒雖道得 八十老人行不<sub>レ</sub>得 靈山和尚每日若無<sub>二</sub>鳥窠一語<sub>一</sub> 我徒盡泥<sub>二</sub>乎本來無一物 及不思善不思惡 善惡不二邪正一如等語<sub>一</sub> 以撥<sub>二</sub>無因果<sub>一</sub> 而世多日用不淨之邪師也 故余作<sub>二</sub>此偈<sub>一</sub> 以示<sub>二</sub>衆云<sub>一</sub>

學者撥無因果沈

老禪一句價千金

諸惡莫作衆善行

須<sup>レ</sup>在 先生醉裏吟<sup>一</sup>（『狂雲集』）

——白居易が鳥窠和尚に「仏法の大意とはどういふものですか」と問うと、鳥窠が「もろもろの悪をなさないこと、もろもろの善を行ふことだ」と答えた。そこで、白居易が「それなら三歳の子どもでも理解できることです」と言うのと、鳥窠は「三歳の子どもでも理解できるが、八十歳の老人でも行ふことは難しい」と答えた。靈山和尚はいつも「もし鳥窠和尚の一語がなかったら、私たちの宗徒はみな、人間は本来無二物の存在であるとか、善とも思わず悪とも思わずとか、善悪は二つのことではない、邪正は一つのことであるとかいふ語に引きずられ、因果の理を捨て去り、世間に日常の汚らしい邪悪な師が多くなろう」と言っていた。だから、私はこういう偈を作つて一門の衆に示す。

禪の初学者は因果の理を無視して信じないが、老師鳥窠の一句には千金の値打ちがある。「諸惡莫作 衆善奉行」の教へは、必ずや白居易先生の酔つてうたう詩にも存在するだろう。

「諸惡莫作 衆善奉行」については、滝澤精一郎氏が、京都大徳寺の真珠庵は一休の遺品を多く伝え、諸惡・衆善の筆法、適逸の書も其の中にあつて樂天に寄せる志趣の惇信なるを今に偲はしめる。（『禪林の文学——林下水辺の系譜』）

と言われたとおりである。一休の好んで大書する言葉であつた。一休は靈山和尚（徹翁義享のこと。大徳寺第一世）を介して、禪の先達鳥窠和尚の門弟としての白居易を敬愛したと言えよう。

一休には、別に鳥窠和尚その人を詠じた偈もある。鳥窠道林（七四一—八二四）は、牛頭宗徑山道欽の法嗣。松の上に坐して住居

としたという。

賛 鳥窠和尚

巢寒樹上老禪翁

寂寞清高名未空

諸惡莫作善奉行

大機須<sup>レ</sup>在 醉吟中<sup>一</sup>

この偈の転結句は、前の偈と同工異曲であり、「醉吟」の語は自ら醉吟先生と号した白居易その人とも考えられる。この点について、薩木英雄氏は次のように述べておられる。

私は、結句の醉吟は個有名詞でなく普通名詞に読みたい。鳥窠和尚が酒に酔つぱらつたという話は聞いたことがないので、醉吟するのは白樂天であると共に、一休自身なのである。（『中世風狂の詩』）

しかし、いずれにしてもこの二首の偈には、白居易の存在が明瞭に認められる。一休にあつては、白居易と禪とは切つても切れない関係であつたようである。それ故、白居易を詠じようとするれば、必然的に偈になつたのであろう。

3

白居易（七七二—八四六）、字は樂天、香山居士、醉吟先生と号した。貞元十六年（八〇〇）進士に及第、校書郎、翰林學士、左拾遺、江州司馬、忠州刺史、杭州刺史、蘇州刺史、河南尹、太子少傅

等を歴任し、刑部尚書を以て致仕した。一時越権の罪で江州に流され、廬山の香鑪峰下に草堂を構えたりしたが、官僚として最高位に達している。『白氏文集』七十五巻を完成したのは、七十四歳の時であった。そして、この『白氏文集』が『源氏物語』や『枕草子』以来、日本文学に多大な影響を与えたことは、周知の事実である。しかし、つとに芳賀幸四郎氏が指摘されたように、五山禅林の間では白楽天に対する評価は低下し、関心は稀薄化していた。

翰林五鳳集に出ている白氏関係の詩は江西龍派、月舟壽桂の「賛白楽天」三首、天隱の「讀樂天登第詩」一首、雪嶺の「白傳八節灘圖」一首の計五首だけで、これを先にみた陶淵明関係の六十数首や、次にみる李白・杜甫さらに東坡・山谷に比較すれば問題にならぬほど少い。これは畢竟、禅僧社会への彼の影響力が凋落しつつあったこと、少くも彼が李杜坡谷にくらべて、禅林の関心の圏外に去りつつあったことを暗示するものでなかろうか。〔中世禅林の学問および文学に関する研究〕

おそらくそのことと関係があらう。一休には白居易を詠じた詩はない。次も偈である。

#### 題「白樂天像」

勲業名高白樂天

自然流落絶「塵縁」

鼓林失志山林輩

莫訝雙林寺裡禪（狂雲集）

——すぐれた詩業で名高い白樂天は、自然に落魄して俗世の縁を断

ち切った。そして、今五山叢林は志を失い、林下も同様であるが、怪しんではならぬ、雙林寺の流れを汲む居士禪を。

起承句は、『白氏文集』で名高い白居易が仏教に帰依したことを印象深く述べたものである。転結句は、現今の五山も林下も頽靡墮落していると厳しく批判し、白居易の居士禅の価値を認めようとするもののようである。

「双林寺」は傳大士（善慧大士）の居所の名。傳大士（四九七一五六九）は、半僧半俗の居士で『碧巖録』第六十七則にも登場するが、一休は白居易をこの人に重ねてうたっているであろう。白居易もまた、晩年自らを香山居士と号した。

孫昌武氏が指摘しておられる。

元和十年、白居易は江州に貶謫されるが、これは彼が直接身に受けた大打撃であった。「元和十八溪亭に題す」詩には

余方鑑峯下 余鑑峯下に方り

結室爲居士 室を結びて居士と爲る

といっており、この時彼は已に自らを「居士」とみていたのである。そして彼は廬山の東西二林寺の僧と結社をつくり、習禅は更に精進を加えたのであった。（副島一郎訳「白居易と仏教・禅と浄土」）

#### 4

今一つ一休には白居易を対象として詠じた作がある。体裁は詩であるが、これも偈というべきであろう。

白楽天

留得詞華百億春

千言万句与居新

古今独証之無老

世許出頭天外人（底本以外の『狂雲集』）

——すぐれた詩文を幾度もの春に書き残し、おびただしい詩句は居を移す度に新しくなった。古今を通じて生後七ヶ月にして「之」と「無」を読み分けたのは先生一人、世に許された異能、天上の人。

起承句は、詩文の大家白居易が絶えざる研鑽により詩句を更新したことを述べ、転結句は、彼が並みはずれた神童であったという逸話を取り上げ、長じては人界を超える人物になったとうたっている。転句の「之無」の話は、『唐書』『新唐書』にもあり、

其始生七月、能展書姆指之無兩字、雖試百數不差。（『新

唐書』白居易傳）

柳田聖山氏によれば「宋代金山で開板された楞伽經の序にもあつて、当時周知」（日本の禅語録第十二卷『一休』）のことであつた。この為か、この一篇も「偈」の集『狂雲集』に収められている。

また、結句の「出頭天外人」が、『碧巖録』の語であることにもよるのであろうか。

出頭天外一看。誰是箇中人。（『碧巖録』第六十三則、評唱）

ともかくも、転結句は禅との関係が色濃い部分だと言えよう。そして、そのように見ると、結句は白居易がただに詩人として傑出してゐることを述べたのではなく、禅境においてもとりわけすぐれていたことを賛嘆していることにならうか。

因みに、これ以外に白居易の名が出る詩偈が二、三あるので瞥見しておこう。

痛飲三盃未湿唇

醉吟只慰樂天身（「不飲酒戒」底本以外の『狂雲集』）

暗認譬喻作実会

苔衣雲帶樂天吟（「倭国以譬喻作実二首」の一首目の三四句、

底本以外の『狂雲集』）

帶雨春潮一曲声

樂天始識醉吟醒（『狂雲詩集』所収の「琵琶」）

ただ一首の主題に「樂天」を引き合いに出しているだけで、ここではさほど重要とは思われない。

5

白居易が仏教、特に禅に通じていたことは一般に、あまり知られていない。白居易と仏教に関する論考も少ない。しかし、彼自ら「醉吟先生傳」において言う。

性、酒を嗜み、琴に耽り、詩に淫す。凡そ酒徒、琴侶、詩客、多く之と遊ぶ。遊ぶの外、心を釋氏に棲ましめ、小中大乗の法を通學す。嵩山の僧如滿とは空門の友たり。

白居易にとって仏教は極めて大きな位置を占めていた。

このことを正面から取り上げた孫昌武氏は、宋の蘇轍の白居易評を引きながら、次のように述べておられる。

即ち仏教は彼にとって単純な思想的理論ではなく、ただの内的信仰というだけでもなく、人生を生きたる指針であり安身立命の基盤なのだ。そのため仏教に対して彼は王維ほどの熱心さと敬虔さもなく、柳宗元の理論的探究の深さにもかなわないが、生活実践においては当時の仏教の主流―禪宗の精神を貫徹し、世事に臨機応変し内心の矛盾を解決する独特の態度をうち立てえたのである。(前掲書)

こうした白居易の姿を、一休はしばしば禪籍の中に見出し、傾倒していったのであろう。例えば、先に見た鳥窠和尚との問答は『景德伝灯録』四『五灯会元』二『正法眼蔵』等にあつて有名であり、『祖堂集』巻十五は白居易と李万巻が帰宗智常に道を問うた話を載せているのである。

一休の三首の偈は、白居易を単に詩人としてではなく禪者として敬愛していたことを物語るものであった。そして、ここに一休独特の白居易の受容を見ることは、それほど困難なことではないであろう。(二〇〇六・一〇・三二)

## 参考文献

中本環『狂雲集・狂雲詩集』(新撰日本古典文庫5) 現代思潮社

市川白弦校注『狂雲集(一休宗純)』(『中世禅家の思想』日本思想

大系) 岩波書店

加藤周一 柳田聖山『日本の禅語録第十二巻一休』講談社

平野宗浄訳注『一休和尚全集第一巻狂雲集(上)』春秋社

藤木英雄『中世風狂の詩―一休「狂雲集」精説抄―』思文閣出版

芳賀幸四郎『中世禅林の学問および文学に関する研究』日本学術振

## 興会

瀧澤精一郎『禅林の文学―林下水辺の系譜』桜楓社

佐久節訳『白楽天全詩集第四巻』(復刻愛蔵版国訳漢文大成) 日

## 本図書センター

高木正一注『白居易下』(中国詩人選集13) 岩波書店

片山哲『大衆詩人 白楽天』(岩波新書) 岩波書店

孫昌武副島一郎訳『白居易と仏教・禅と浄土』(白居易研究講座第

## 一卷『白居易の文学と人生I』勉誠社

佐木英雄『五山文学における白詩の受容』(白居易研究講座第四巻

## 『日本における受容(散文篇)』勉誠社

西谷啓治柳田聖山編『禅家語録Ⅱ』(世界古典文学全集36B) 筑摩

## 書房

朝比奈宗源訳註『碧巖録中』(岩波文庫) 岩波書店

高楠順次郎編『大正新修大蔵経』五十一

小川環樹編『唐代の詩人―その傳記』大修館書店

近藤春雄『中国学芸大事典』大修館書店